

舟と琴

【解説】

この『舟と琴』は、親友の尾上墨雪さんから依頼されて作曲したものです。はじめは舞踊曲として作り、のちに演奏用にアレンジしました。

二〇一〇年、紀尾井ホールでの演奏でお聴きください。

この曲は、古事記にある「枯野（からの）」という部分をそのまま歌詞に用いて作曲しています。簡単にあらすじを申しますと、仁徳帝治世の頃、宮殿を覆う木が巨木に成長して宮殿に日がささなくなったので、その木を切って明るさを取り戻しました。太古よりの命を繋いできた巨木には、自然の魂が宿っています。その木で舟を作り、淡路島から宮殿のある難波宮に、良い水を毎日運びました。やがて舟が壊れてしまった時、その舟の木を使って藻塩を焼き、良質の塩を大量に得たのですがその木の芯はどうしても焼けませんでした。

芯は、木の魂そのものだったのでしょう。

そこでその芯をお琴に作って鳴らしたところ、お琴の音は、七里四方に響き渡り、人々を幸せにしたそうです。

木でスピードのある舟を作れるのは、科学技術というものです。その舟の廃材を利用して塩を焼いたことも、それだと思っています。

しかし、このお話の芯にあたる部分は、木には魂があり、魂の塊を琴に作ると、たった一面の琴が七里四方の人々を幸せにしたということです。人々の最初の幸せは、琴に象徴された音楽だということなのだと思うのです。

改めて音楽の大切さを思った次第です。

なお、演奏会当日、『舟と琴』の後にアンコールも致しましたので、それも引き続きご覧いただくことにしました。

アンコールは『勸進帳』の滝流しから演奏しています。そこに、『舟と琴』にはいなかった人間国宝の堅田喜三久さんが特別出演してくださっています。

お楽しみいただけましたら幸いです。

注…ことという字は、古事記に従って、「箏」ではなく「琴」という字を使っております。